# 大阪府

## 研究協力校（課程又は障害種）

・大阪府立生野支援学校（知的）
・大阪府立東淀川支援学校（知的）

## 研究の成果

**観点１：**
**各モデル事業内、及び近隣自治体間における概念（用語）の共通理解・合意形成**

**1．　キャリア教育マトリクスの活用・再検討**

大阪府は、研究協力校である 2 校の大阪府立生野支援学校、大阪府立東淀川支援学校ともに、キャリア教育の観点を含んだ教育課程の改善に向けて検討を行い、小・中・高一貫したキャリア教育を充実させることを研究目的としている。

生野支援学校は、キャリア発達の定義や育ってほしい力をまとめたものとして、キャリア教育マトリクス表を作成している。育ってほしい力を４つの領域（①人間関係形成・社会形成能力②情報活用能力③将来設計能力④意思決定能力）に分け、小学部の児童をイメージしながら第一段階、中学部の生徒をイメージしながら第二段階、高等部の生徒をイメージしながら第三段階というように学部毎のキャリア発達の目標を設定した。平成 29 年度までは個別の指導計画の様式が学部毎に異なっていたが、平成 30 年度の第二年次では見直しを行い、２年かけて項目の統一を行っている。

東淀川支援学校もキャリア教育マトリクスを作成しており、能力獲得時期について、小学部は職業及び生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期、中学部は職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期、高等部は職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期と位置づけている。「キャリア教育マトリクス（育てる力）」でキャリア発達の段階を「人間関係の形成、コミュニケーション」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の４領域からとらえ、学部ごとに段階的に育てたい力を設定し、それらを象徴する言葉として小学部「気づく」中学部「伸ばす」高等部「活かす」を各学部のテーマとしている。平成 30 年度はこの「キャリア教育マトリクス(育てる力)」と「キャリア発達段階表」の活用と見直しを行っている。

**観点２：**
**教育課程・個別の指導計画の実施状況とその評価**

**2.　教育課程の実践と改編**

生野支援学校では、教育課程の編成に関して、教育課程検討委員会（管理職、教務部長、各学部主事、各学部教務主任）を月に１回開催しており、その場でキャリア教育マトリクスや年間指導計画、個別の指導計画の様式、２学期制等について検討している。また、学部主事、教務主任を中心に各学部でも学習指導要領を基に教育課程の見直しを行った。平成 30 年度からは見直した教育課程に基づいて実践している。

東淀川支援学校では、教育課程実施計画表に基づく年間計画に沿って授業を行い、授業研究を中心とする実践研究を通して組織的・計画的に教育活動の質の向上をはかり、教育目標の達成をめざしている。平成 30 年度ではキャリア教育の視点で児童生徒につけさせたい力として挙げている「自ら考え行動する力」「変化に対応できる力」「コミュニケーション力」を授業の中で高める工夫が、それぞれ「主体的な学び」「深い学び」「対話的な学び」に結びつくという仮説に立ち、３つの力を高める工夫を集積させ、全教員と共有することで、授業改善を展開させていく方針を固め、全ての学部の教育課程を改編した。

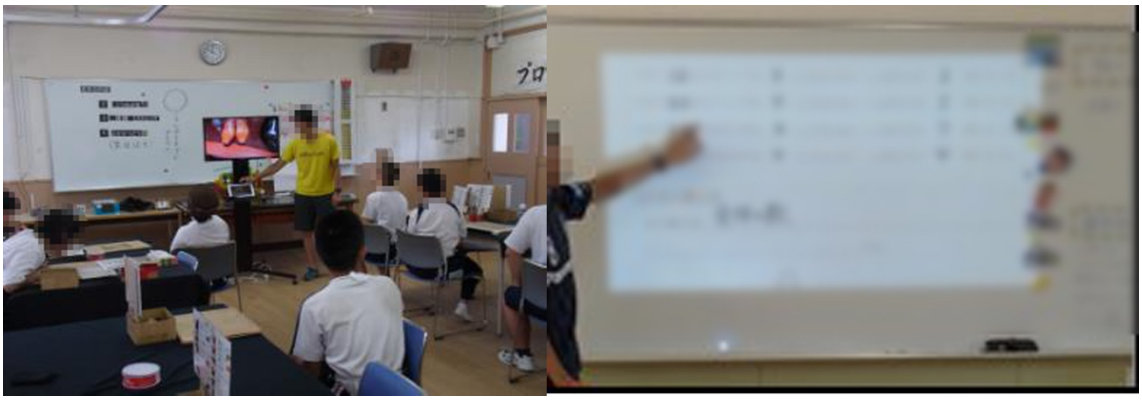
**観点３：**
**個のニーズにあわせた指導法、学習環境・支援の工夫**

**3.　ICT 機器の将来的な活用**

生野支援学校では、本格的にタブレット型端末等ＩＣＴ機器を教育活動に活かせるよう、環境整備をはかり、発達段階に応じた学力の向上をめざすためにＩＣＴ関連研修を夏季休業中に 2 回実施している。教員がＩＣＴ機器の基本的な扱い方や授業実践事例を学び、次年度への導入計画を行っている。実際に、タブレットで製作したアプリを使用して地下鉄の自動券売機の操作方法を学習する授業が行われた（資料１）。

**資料１　生野支援学校での ICT 機器の導入様子**

東淀川支援学校でも ICT 機器の授業活用に向け、授業改善アドバイザーの助言を積極的に活用し、教材開発、作業環境改善に取組、ICT 活用の好事例、効果的な教材例を教員が共有できるシステムを作ることを目指している（資料２）。



**資料２　東淀川支援学校での ICT 機器の導入様子**

**観点４：**
**障害のない幼児児童生徒・地域社会との交流及び共同学習の設定**

**4.　「おもてなしプロジェクト」**

東淀川支援学校は、平成 31 年 2 月に実践研究事業中間報告会を行い実践研究事業の内容について協議を行っている。その中で、報告会では外部の参加者が多く来校するため、その機会に「おもてなしプロジェクト」として児童生徒の活動や教職員のポスター発表も行っている。

「おもてなしプロジェクト」は、来校者の立場になり相手が喜ぶことを考える、また、来校者が活用できることを考えて資料やおみやげを作成することなどを学習活動の中心にすることで、個々が役割を担って来校者のために仲間とともに活動するプロジェクトである。これにより、「できることがうれしい」「ほめられてうれしい」「役に立ってうれしい」を体感する機会になり、個々のキャリア発達を促すことができる。このプリジェクトにおいて小学部ではウェルカムボード（資料３）、中学部ではグルメマップ（資料４）、高等部ではコースター（資料５）、それぞれ来校者を想定して製作し、学部共同で取り組むことのできる良い機会となっている。

**資料３　ウェルカムボードの作成**

**資料４　新大阪グルメマップの制作**

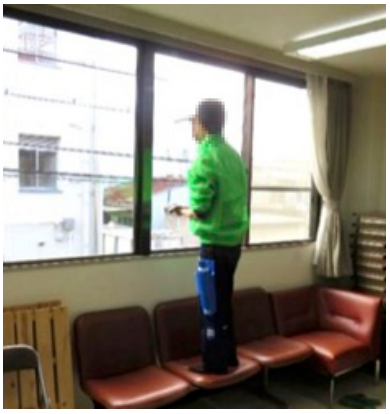
**資料５　コースターの製作**

**観点５：**
**多面的な視点からの学習評価・授業評価・学校評価の実施**

**5.　教育課程改善アドバイザーの活用**

生野支援学校は教育課程改善アドバイザーに関して、平成 30 年度は高等部のコース制の授業を中心に授業参観し、助言を受けることにしている。コース主担者と週１回、定期的な会議を設けコース制の取組内容や計画等の方向性について共通理解をはかる機会を持った。キャリア教育についても定期的に実践状況の確認し、教育課程改善アドバイザーと校長との懇談もできるだけ毎回行い、連携をはかることにしている。

職業コース生徒の校外清掃実習について検討を進め、７月に１回目として東小路会館老人憩いの家で実施した（資料６）。実習の実施にあたり、教育課程改善アドバイザーから事前に実習の趣旨等を判りやすく説明したリーフレットを作成する等の助言や、事前の打ち合わせや当日にも同行し、作業内容の確認や活動の進め方について助言を受けた。その後、校外清掃実習の今後の進め方の検討も進め、12 月には新規の施設を含め ２ 施設で実習を行ったほか、２ 月にも同じ ２ 施設での実習実施や、他の実習先の開拓も進めた。また、実習以外でも外部人材を招いたビジネスマナー講座の参観後に生徒の実態に応じた事後指導の方法や、高等部で行った販売学習における実施方法、園芸の授業における作物の育て方や生徒の指導方法、授業全般における安全確保・構造化・生徒対応・保護者対応の方法など、随時具体的な助言を受けている。



**資料６　小路会館老人憩いの家での実習**

**観点６：**
**新学習指導要領に対応した特色ある取組**

**6.　キャリア教育の視点に立った取組**

生野支援学校は、校内で「教育課程検討委員会」を立ち上げて検討を重ね、新しく始まった「職業コース」の取組内容を充実させて、「キャリア教育」の観点から小学部、中学部、高等部の３学部の教育課程を見直し、「キャリア教育マトリクス」を作成することを重点課題とした。また、校内の資源を活用し、異年齢の集団との関わりを通して、生徒の自己有用感を高めるための内容を取り入れることを進めている。各学部間の連携や児童生徒間の交流を増やし、協働での作業に取り組む機会を増やしている。

東淀川支援学校は、学校の特色として開校当初よりキャリア教育の充実をはかっている。平成 28 年度に児童生徒の実態を踏まえて東淀川支援学校独自の「キャリア教育マトリックス(育てる力)」を試作し、平成 29 年度には各教科等の指導でキャリア発達の目標を確認するために「キャリア教育マトリクス」を活用して「キャリア発達段階表」を試作した。開校当初からキャリア教育を教育活動の中心としてきている実績を鑑み、独自の「キャリア教育マトリクス」と「キャリア発達段階表」を日常的に活用できるよう計画的に研究を進めている。